

金子智太郎

本報告はかつて報道において発展した録音によって出来事を表現する手法が、アマチュアに普及することでいかに展開していったのかを考察する。そのために 60 年代半ばから 70 年代にかけていくつも開催されていた録音コンテストに着目したい。約 20 年のあいだに、録音コンテスト応募作品の傾向はたえず変化していった。本報告はこの期間の音による出来事の表現を 4 つの動向に区別し、それぞれの動向の特色と背景を検討する。

レコーダー自体がまださほど普及していなかった 60 年代半ば、技術雑誌『無線と実験』は 62 年から 67 年まで 5 回の「テープ録音コンテスト」を主催した。このころに多かった作品は地域の演奏会の録音だが、自然や都市の風景の音、家族の声や野鳥の声、音によるドラマやミュージック・コンクレートもあった。作品の構成はラジオ番組の模倣が多く、このことが審査員から批判的に指摘されていた。この時期のコンテストを支えていたのは、テープ・レコーダー自体の製作にも取りくむアマチュア技術者だった。

63 年に創刊され、後のオーディオ・ジャーナリズムを牽引した雑誌『ステレオ』は、69 年と 71 年に「ステレオ・レコーディング・コンテスト」を主催した。『無線と実験』も 71 年にあらためて「テープ・レコーダー録音コンテスト」を開催した。これらのコンテストはともに「録音会」部門と投稿部門に分かれていた。録音会とは、プロの音楽家による録音をアマチュアの参加者が一斉に録音する会であり、当時オーディオ・メーカーがよく開催していた。この時期のコンテストには、オーディオ・ジャーナリズムの展開にともなう、録音の質に対する関心が認められる。

70 年代はじめごろから、野外で録音を楽しむ活動「生録」が流行しはじめた。流行の要因としてはエア・チェックやラジカセの普及があげられるだろう。この流行はソニーをはじめとするメーカーやジャーナリズムにも後押しされ、それらが主催する録音コンテストも多数開催された。応募作品数もそれまでと比較して格段に増えた。70 年代半ばの録音コンテスト入賞作品の特色にはアマチュアリズムの重視がある。特に複数のコンテストで審査員をつとめた映画評論家、荻昌弘の発言にはこの傾向が顕著に見られる。

70 年代後半になると生録専門誌や生録をテーマとするラジオ番組も登場した。一方、コンテスト応募作品はそれまでと比べて凝った作品が増えた。電子音を駆使して仮想音響世界をつくり上げた作品や、コメディやメタな要素を含んだ作品がコンテスト上位を占めた。そのなかで、録音を評価するというコンテストの意義は次第に薄れていったようだ。生録の流行

自体が70年代末に終息に向かい、録音コンテストも少なくなっていた。

録音コンテストにおける出来事の表現は大きく揺れながら展開した。60年代末には録音の質に対する関心の高まりがあり、70年代前半にはアマチュアリズムへの回帰があり、70年代後半はマニエリスムのような展開の後に、流行の衰退があった。報道からアマチュアの手に移った音による表現を左右したのは、オーディオ技術の展開に加えてメーカーやジャーナリズム、審査員の意向、参加者の戦略などの要因だった。技術に関してもラジオやシンセサイザーなど別種の音響機器が関係していた。録音コンテストという事例はたしかにマイナーだが、テクノロジーを用いたあらゆる表現に共通するであろう、こうした多様な要因の働きを凝縮して見ることができる。